

令和元年6月27日現在

機関番号：31302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K12379

研究課題名（和文）被災地における暮らしの再構築とその民俗的背景に関する調査研究

研究課題名（英文）An investigative study on the reconstruction of living in disaster-stricken areas and its folkloristic background

研究代表者

政岡 伸洋（MASAOKA, Nobuhiro）

東北学院大学・文学部・教授

研究者番号：60352085

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、宮城県の東日本大震災の被災地を対象に、阪神淡路大震災の被災地も視野に入れ、民俗学の立場から、そこにみられる様々な現象を把握し、震災前の暮らしを踏まえつつ、その意味について考えるものである。その結果、もともと被災地ではイエを軸に、陸・海を問わず自然環境を最大限に活用し、変化の中で暮らしが営まれていたこと、復興支援事業による混乱は被災地の「日常」生活における地域の文脈を否定した点にあったこと、震災後の動きは彼らの文脈に基づく「日常生活の回復」のプロセスであったことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の大きな特徴は、被災地の動きを災害を軸に理解するのではなく、「日常」の暮らしを軸に、災害というものに遭遇し、復興支援事業等の政策も含め、被災地の人びとがそれにどう向き合い、生活を再建していこうとしたのかを、具体的事例に即して考えようとした点にある。この「日常」から考える視点の重要性は、これまでの研究でも指摘されていたが、あいまいな理解と個別性の議論にとどまっていた。しかし、本研究では研究者の地域間交流および国際会議への参加を積極的に行い、具体的事例に即した議論を通して抽象化を図った結果、震災後のプロセスを「日常生活の回復」という視点から考える必要が主張できた点に意義があったと考えている。

研究成果の概要（英文）：This present study focuses on the areas affected by the 2011 Great East Japan Earthquake in the Miyagi Prefecture where reconstruction support projects have ended and mass relocation to high ground has begun. While considering the 1995 Great Hanshin-Awaji Earthquake from the perspective of folklore studies, the study aims to understand the various phenomena found there and attend to the way of life and its significance before the earthquake. The results reveal that the disaster-stricken areas were originally centered around IE (イエ), making the most of the natural environment regardless of the sea or land to living with the changes that ensued. The confusion caused by the reconstruction assistance projects was not due to these changes but rather because of ignoring the local context regarding "daily" life in the disaster-stricken areas, while the post-earthquake activity was, in fact, the process of "restoring everyday life".

研究分野：民俗学

キーワード：暮らしの再構築 コミュニティの再編成 民俗文化の活用 復興キュレーション 日常生活 生業の展開 地域間の研究者交流

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

東日本大震災のような大規模な災害による被災地に見られる現象に対し、人文・社会科学的な視点から研究を行う場合、「脆弱性」や「回復力」といった、これまでの災害研究の成果を踏まえることが多い。災害を軸に、被災地における様々な現象を通して、災害とは何かを考え、それを踏まえた防災への活用等を視野に入れ分析を試みる傾向が顕著である。

これに対し、民俗学では柳田國男(1928)所収の「二十五箇年後」や山口弥一郎(1943)のように、災害状況のみならず、そこに起こる様々な問題を、地域の暮らし、そこに暮らす人びとの文脈というものを前提に、民俗誌的な視点から考える点に大きな特徴がある。言い換えれば、多くの研究は災害研究の成果を軸に被災地での展開を見ようとするのに対し、民俗学では日常の暮らしの文脈を押さえた上で、震災以降の人びとの動きの意味を考えようとする点に大きな違いがあるといえる。

しかし、今回の東日本大震災に対しては、川島秀一(2012)や政岡伸洋(2012、2013、2014)など一部の研究を除き、文化財レスキューに注目が集まりすぎたためか、民俗学的な視点からの研究は不十分な状況であった。特に、復興支援事業が終了し高台への集団移転も始まったこの段階は、自立した暮らしの再構築にとってきわめて重要な時期であるにもかかわらず、研究者の中には、これまでの成果をまとめ、被災地から去っていった例も目立ち始め、報道される機会も減ってきており、これからの動きをきっちり押さえる必要があることが指摘できる。

2. 研究の目的

以上の点から、本研究では復興支援事業が終了し高台への集団移転も始まった東日本大震災の被災地である本吉郡南三陸町戸倉波伝谷や石巻市牡鹿町鮎川といった宮城県の三陸沿岸地域を中心に、民俗学の立場から現地調査によって得られた資料に基づき、そこにみられる様々な現象を把握するとともに、震災前のあり様にも注意しつつ、その意味について地域の暮らしの文脈から考えることにした。また、阪神淡路大震災の被災地である神戸市長田区および淡路市富島でも同様の調査・分析を行い、比較検討する。従来の災害研究に比べ、より地域研究的な視点からの分析を行うが、これにより震災問題と人文学・社会科学をめぐる課題について、これまで以上に人と暮らしを重視した、従来とは異なる新たな知見を提示する。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、本研究では中心となる調査対象地を宮城県三陸沿岸および阪神淡路大震災の被災地において、地域の暮らしの文脈を踏まえつつ、震災前のあり様を含めた現地調査を実施し、資料の収集及びその分析に重点を置く。特に、宮城県では自立した暮らしの確立に向けてのプロセスを、阪神淡路大震災関連ではこれまでの推移の再検討を試みる。また、新潟県中越地震や北海道南西沖地震の被災地において、巡検調査および現地の研究者や市民を対象としたワークショップや意見交換会を実施することで、そこで得られた結論を普遍化させることも目指す。さらには、最終年度には、国際会議にも参加し、本研究で得られた知見を、グローバルな視点から普遍化するための機会を設けることにした。

4. 研究成果

ここでは、研究代表者が行った宮城県本吉郡南三陸町戸倉波伝谷(以下、波伝谷と記す)の事例を中心に紹介したい。なお、事例等の詳細については、政岡伸洋(2018)を参照いただきたい。

(1) 震災前の暮らしの特徴の再検討と新たな知見

本研究では、主に震災前の暮らしの特徴の再検討と、それを踏まえた上での震災後の動きに対する調査・分析を中心に行った。その結果、特に生業の展開と村落組織のあり方について、震災前における被災地の暮らしに対する従来の研究の理解に対し、新たな知見が得られたが、それは以下の通りである。

まず、生業についてであるが、一般的に東北地方は古くからの暮らしが残っているというイメージがあり、例えば三陸沿岸であれば、海に関わる仕事を受け継いできた感がある。しかし、今回、その歴史的展開について分析した結果、実際の姿とは異なることが明らかとなった。

例えば、波伝谷の場合、震災前には現金収入のためのワカメやホヤ・カキ等の養殖業および自家消費用の農業を軸にウニやアワビ漁も行き、自らを漁師と称するなど、昔から漁村であったかのように見える。しかし、近世期には製塩業が盛んで、その導入により本百姓が約3倍に増えるなど、これが軸となっていた。また、それ以外にも、農業のほか、ウニや昆布の採取、サケ・アユ漁を行うなど、製塩業を軸としつつ、陸や海、川での生業が複合的に存在し、これが重なり合いながら暮らしが営まれていた。

しかし、近代に入ると製塩業は衰退し、米・大麦・大豆・小豆を中心とした農業と志津川湾内での漁業が中心となるが、そこに新たな生業として養蚕業が導入される。戸倉地区では1884年に130戸が確認できるが、1890年には288戸中285戸というように、ほぼ全戸が従事することになる。海を利用した製塩業が衰退すると、陸の養蚕業へとシフトしていくのである。

この養蚕業も、戦後になって海外の安いものが流通するようになると衰退の一途をたどる。その中で新たな軸として注目されたのが志津川湾内を利用した養殖業であった。これは1960年のチリ地震津波以降からだとされるが、このように三陸沿岸地域では、一般的なイメージと

は異なり、各時代のニーズに合わせ、陸・海を問わず、自然環境を最大限に活用し、変化を前提とした暮らしが営まれてきたのである。

また、これら軸となる生業のほか、農業や漁業、炭や薪といった山の利用など、様々な仕事を組み合わされている点も大きな特徴であるが、それは各イエの状況によって種類や配分が大きく異なっており、その意味でイエの独立性・自立性が非常に高い点も明らかとなった。

つぎに、村落組織であるが、波伝谷で最も注目されるのが契約講である。波伝谷唯一の村落運営のための組織であり、表面的な戸数制限のため、近畿地方の宮座のような古くからのイエで構成される特権的な集団のようにも見える。しかし、成立当初は全戸が加入し、制限が設けられたのは戸数の増加に伴って共有財産などの資源利用に支障が出たためとされている。それゆえ欠員が出ると新規加入が認められ、原則として引き続き全戸を視野に入れたものであった。

契約講の機能を見ると、公共事業等での役場との折衝や各イエ間の利害調整のほか、共同作業や共有財産の管理・利用といった、暮らしを成り立たせるため、イエ単独では対応が難しい部分を支援・補完する相互扶助的性格が顕著であった。その他の組織を見ても同様で、きわめて多様で自律的なイエを単位に暮らしが営まれ、村落組織はそれを支援・補完するというように、あくまで暮らしの軸はイエであり、古くから続く共同体性格を持ったものではなかった点は押さえておく必要がある。

(2) 震災後の動きで注目された点

このような波伝谷の暮らしも、2011年3月11日の東日本大震災の津波被害によって完全に破壊される。震災当時、波伝谷では76世帯が暮らしていたが、高台にあった1戸を残し全戸流出、残った1戸も全壊という状況で、集落の景観は大きく変わってしまった。津波による犠牲者は16名、その後の混乱の中で2名が亡くなる。ワカメ・カキ・ホタテの養殖業の被害だけで、戸倉地区全体で約11.5億円という状況であったが、そこから波伝谷の人びとは、暮らしの再建に向けて動き出すことになる。紙数の関係で、今日までの動きをすべて紹介できないので、ここでは復興支援事業による対応、春祈禱という集落全体の祭りの「復活」、村落運営組織の再建といった注目される3点に絞って紹介したい。

まず、復興支援事業による混乱であるが、波伝谷の場合、「がんばる養殖」がこれに当たる。これは、2011年度第3次補正予算により措置された対策で、震災で壊滅的な被害を受けた被災地域の養殖業について、共同化による生産の早期再開と経営再建の取り組みに対して支援を行う事業である（鴻巣正：2012）。波伝谷では、震災直後から震災前の暮らしをモデルとして生活再建を目指そうとしていたが、費用面でも限界があった。そこで、これを採用しようという話になったのであるが、その際に問題となったのは、集落単位の共同作業を前提としていた点であった。従来の方はイエを単位にした個人経営に近いものであったが、それが共同作業による給与制になることは、同じ養殖業といっても転職に近いものであった。実際に動き始めると、各イエの方法がぶつかり合うことになり、効率化を目指した共同作業化が逆に地域社会の結束を崩すことになったのである。ただし、この混乱はその後少しずつ落ち着き始める。彼らは、生活の基盤ができるまでの準備期間として、この復興支援事業を再定義したのである。波伝谷の「がんばる養殖」は、2015年1月に終了するが、これを契機に養殖いかだの数を一定数に制限・管理し、量より質を重視する養殖業へ転換するとともに、養殖版海のエコラベルとも称されるASC（水産養殖管理協議会）の認証を日本で最初に取得しブランド化を図る一方、その経営については各イエ単位に戻すのである。

つぎに、春祈禱についてであるが、「がんばる養殖」による混乱が続く中、2012年4月15日に「復活」する。震災前の春祈禱は、毎年契約講の春の総会の翌日にあたる3月第2日曜日に若者たちによる獅子舞が集落内のすべての家を1戸ずつ回り、集落内の厄災を祓うというもので、1つの行事に波伝谷の老若男女すべての人が関与することから、人びとをつなぐ重要な行事として位置づけられていたが、これが震災から1年後に「復活」することになったのである。このような震災後の早い段階での民俗行事・民俗芸能の「復活」は各地にみられ、東日本大震災の被災地における動きの大きな特徴ともいえるが、震災を乗り越えた強固なコミュニティ、伝統・民俗の力といったイメージで、マスコミ等にも取り上げられた。しかし、実際には日時や行事内容に違いがみられるなど、波伝谷の春祈禱の場合、復興支援事業による混乱の中、地域社会の結束が崩れようとしていた時、この行事が人びとをつなげる重要な機会となっていた点が強く意識され、活用されたのであった。つまり、「復活」というより、災害状況の中で震災前の民俗行事が活用され、その葛藤を解消するため、新たに創造されたものだったのである。

最後に、村落運営組織の再建であるが、震災直後は混乱状況ということもあって、契約講が前面に出ていたが、高台への集団移転が進み始めた2015年の契約講の春の総会において初めて公に議論され、全戸集会も開催された。特に、そのプロセスでは戸数が半減したこともあったが、契約講に加入できない家があり、村落運営に全戸が関われないという矛盾をいかに解消させるかが問題となっていた。最終的には、震災前において、波伝谷全戸を対象としていた自治公民館組織を軸に、村落運営が任されることになるのである。

(3) 以上の事例から見えてきたもの

以上、波伝谷の事例を紹介したが、その結果、次の点が指摘できる。

震災前の波伝谷において、暮らしはイエを軸に営まれ、村落組織はあくまでそれを支援・

補完するものとして機能していた。また、生業もイエを単位に各時代のニーズに合わせ、陸・海を問わず自然環境を最大限に活用し、変化を前提に生活してきた。

その点で、主要産業の存続のみを目指し、集落単位での共同作業を前提とした復興支援事業による混乱は、漁業や養殖業といった個別の生業の性格というより、イエを単位に臨機応変に時代に対応し暮らしを営んできた被災地の人びとの文脈、言い換えれば「生きる方法」を無視したためであった。

暮らしの再建のプロセスを見る限り、まず軸となる生業および拠点となる住居といったイエを単位とした暮らしの基盤づくりが優先され、それを支援・補完する村落組織は最後に整備されたが、これは彼らの暮らしの文脈、「生きる方法」からすれば、至極当然のことといえる。

このような地域文化の重要性は、これまでも指摘されてきたが、ここで重要なのはいわゆる伝統とか不変なものを指すのではない。波伝谷では、震災を契機に養殖業のあり方を時代のニーズに合わせたり、村落運営の矛盾を解消したりしている。変化を拒否していないのである。今回の復興支援事業による混乱の背景で重視すべきは、彼らが積み重ねてきた「日常」の方法を無視した点である。

この点からすれば、災害状況の中、被災地の人びとにとって自らの「日常の回復」こそが最も重要であり、「復興」の名の下で外部者の理想や信念を実現するための実験の場にしてはならないことは主張しておきたい。また、今後、大規模な災害が発生する可能性のある地域では、災害後の混乱を少しでもなくすため、防災はもちろん、これと併せて暮らしの「日常」についても把握しておく必要が指摘できよう。

(4) 研究分担者の成果について

最後に、研究分担者の成果についても紹介しておきたい。まず、宮城県石巻市牡鹿町で調査・研究を行った加藤幸治は、各地の被災地域での災害後の地域社会の動向と、文化を活用した復興に向けた活動や文化創造活動について共有する中で、自分自身がフィールドで実践している活動の方向性やコラボレーションのあり方について再考を余儀なくされ、そこから新たな実践を実験的に行った。具体的には、奥尻島での展示活動から、町の賑わいや盛り場に関する資料や写真等を再整理し、それをどのように展示として提示するかの参考にして、「クジラお宝珍物館」という展示の企画に活かした。また、神戸市長田区の多文化共生にみられる、さまざまな人びとで支えるまちづくりを参考に、石巻市で再興する博物館「石巻文化センター」を市民活動の場とするための市内の市民団体を集めたワークショップをファシリテートした。こうした実践の中から、人文学からの地域振興のかかわりについて研究を進めた。この加藤幸治の研究は、博物館活動を通じた文化レベルでの「日常」の創造といえるであろう。

一方、岡田浩樹は 1995 年に発生した兵庫県南部地震による被害、いわゆる阪神淡路大震災の被災地である神戸市長田区（都市）と淡路市（農漁村）を対象に、災害とその犠牲者の記憶を継承する文化的装置について調査・研究を行った。特に、注目したのがモニュメントやイベントといった近代的な文化装置と、民俗儀礼やアイコンといった近代以前から存在した文化装置といった 2 種類の差である。前者が災害と犠牲者そのものに限定し、1 回的で独立した出来事とその当事者を対象とし、個別性を維持したまま、これを被当事者を含めたコミュニティ、地域社会、社会で共有しようとする。別の言葉で言えば、記憶の周囲への非日常的「感染」（被当事者に当事者意識を持たせるという意味で）と記憶の歴史化が行われる。これに対し、後者は出来事や犠牲者は一般化、匿名化され、日常の生活世界や死生観に組み込まれ、反復されていくことによって継承されることが明らかとなった。この岡田浩樹の研究は、災害と記憶の問題にみられる「非日常」と「日常」のあり方を議論する内容ともなっている。

(5) 今後の課題

近年、日本各地で大規模な災害が発生しているが、その後の混乱を回避するためにも、本研究の成果からすれば、防災面とともに、各地の「日常」というものの把握が重要になってくる。これについては、新潟中越地震や北海道南西沖地震の被災地で開催したワークショップでも共有することができ、また 2019 年に上海で開催された国際ワークショップ「災害文化と死生観」においても、今後災害を対象とした民俗学・文化人類学にとって「日常」という視点をいかに組み込んでいけるかが議論された。この「日常」の問題は、今後の災害を対象とした人文学・社会科学においても、重要な研究課題となっていくものと考えられる。

< 引用文献 >

- 川島 秀一、津波のまちに生きて、富山房インターナショナル、2012
- 鴻巣 正、地域営漁組織の育成と漁業再生の課題 集落を基盤とする漁業の協業化と今日的役割、農林金融、65-6、2012
- 政岡伸洋、暮らしの文化と復興に向けての課題、21 世紀ひょうご、12、2012
- 政岡伸洋、地域の暮らしと復興の課題、学術の動向、18-12、2013
- 政岡伸洋、震災後における民俗の活用と被災地の現在 南三陸町戸倉波伝谷の場合、無形民俗文化財が被災するということ（高倉浩樹・滝澤克彦編、新泉社）2014
- 政岡伸洋、東日本大震災と「イエの継承・ムラの存続」 宮城県本吉郡南三陸町戸倉波伝谷の場合、年報村落社会研究、54、2018

柳田 國男、雪国の春、岡書院、1928

山口 弥一郎、津浪と村、恒春閣書房、1943（三弥井書店より 2011 に復刻）

5. 主な発表論文等（主要なもののみ記載）

〔雑誌論文〕(計 15 件)

政岡伸洋、東日本大震災と「イエの継承・ムラの存続」 - 宮城県本吉郡南三陸町戸倉波伝谷の場合 -、年報 村落社会研究、査読有、54、2018、pp.145-190

加藤幸治、津波常襲地における技術の断絶と継承、人類学研究所研究論集、査読無、4、2018、pp.68-87

MASAOKA Nobuhiro、Die große Erdbebenkatastrophe in Ost-Japan aus dem Blickwinkel der „minzokugaku“(der „japanischen Volkskunde“)、Themen und Tendenzen der deutschen und japanischen Volkskunde im Austausch、査読無、2018、pp.295-315

KOJI KATO、The Story of Cultural Assets and their Rescue、査読無、A First-Hand Report from Tohoku、2017、pp.51-75

〔学会発表〕(計 44 件)

政岡伸洋、灾后重建支援的民俗学介入——以宮城県本吉郡南三陸町戸倉波伝谷地区的“念佛”活動為例、“災害文化与生死觀”學術工作坊 2019

岡田浩樹、日本大地震灾后重建過程中社区与現代性之間的複雜關係、生境：激变世界中的風險感知与災難対応 國際人類學工作坊、2018

加藤幸治、如何能意識到“重建得更好”？日本東部大地震引發海嘯区域的文化場域（=にんべんに尔）生境：激变世界中的風險感知与災難対応 國際人類學工作坊、2018

政岡伸洋、在日本東部大地震后重建生活：基于宮城県の田野、生境：激变世界中的風險感知与災難対応 國際人類學工作坊、2018

加藤幸治、被災地の復興と生活文化をめぐる軋轢 宮城県・牡鹿半島における文化創造と安全、第 12 回人類学関連学会協議会合同シンポジウム「人、自然、テクノロジーの共生に向けて 人類学の挑戦」、2017

加藤幸治、面向復興的 Curation 受災地の重生與文化創造活動、シンポジウム「負歴史遺産、當代歴史意識與博物館」、2017

政岡伸洋、東日本大震災と「イエの継承・ムラの存続」 宮城県本吉郡南三陸町戸倉波伝谷の場合、日本村落研究学会第 65 回大会テーマセッション「イエの継承・ムラの存続 歴史的変化と連続性・創造」、2017

加藤幸治、震災 6 年目の牡鹿半島と「復興キュレーション」、現代民俗学会第 37 回研究会、2017

政岡伸洋、被災地の動きから何が見えてきたのか 宮城県本吉郡南三陸町戸倉波伝谷の事例から、現代民俗学会第 37 回研究会、2017

政岡伸洋、宮城縣波傳谷地方文化的發現 以日本的民俗學視點（宮城県波傳谷の地域文化を發見する 日本の民俗学からのアプローチ）國際フォーラム「地方文化的發現・保存與活用（地域文化の發見・保存と活用）」、2016

MASAOKA Nobuhiro、Die große Erdbebenkatastrophe in Ost-Japan unter dem Forschungsaspekt der Volkskunde（東日本大震災と民俗学の研究視角）ドイツ民俗学会・日本民俗学会共催國際シンポジウム「Perspectives and Positions of Cultural and Folklore Studies in Japan and Germany(ドイツと日本における民俗学の視点と位相)」、2016

〔図書〕(計 2 件)

加藤幸治、社会評論社、復興キュレーション—語りのオーナーシップで作り伝える“くじらのみち”—、2017、255

〔その他〕

本科研で実施した巡検先の地元研究者・一般市民向け公開研究ワークショップ

(1) 「被災地と地域文化」(長岡震災アーカイブセンター、2016 年 9 月 3 日)

政岡伸洋、被災地の 5 年を考える—宮城県南三陸町戸倉波伝谷の事例から—

加藤幸治、ポスト文化財レスキュー期の移動博物館活動と民俗調査—宮城県・牡鹿半島での実践から—

岡田浩樹、ゴースト化する「ニュータウン」—語り部の生成とだんじりの復活—

小谷竜介、宮城県雄勝地域の神楽と地域社会

(2) 「災害・復興と地域文化」(奥尻町海洋研修センター、2017 年 10 月 29 日)

政岡伸洋、被災地の 6 年目を考える—宮城県南三陸町戸倉波伝谷の場合—

加藤幸治、文化における「より良い復興」—宮城県牡鹿半島での実践から—
岡田浩樹、誰が「記憶」を必要とするのか—阪神淡路大震災を事例とした震災の風化の
検証—
小谷竜介、被災地域の民俗芸能と地域社会

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：加藤 幸治
ローマ字氏名：(KATO, koji)
所属研究機関名：東北学院大学
部局名：文学部
職名：教授
研究者番号(8桁)：30551775

研究分担者氏名：岡田 浩樹
ローマ字氏名：(OKADA, hiroki)
所属研究機関名：神戸大学
部局名：国際文化学研究科
職名：教授
研究者番号(8桁)：90299058

(2)研究協力者

連携研究者氏名：小谷 竜介
ローマ字氏名：(KODANI, ryusuke)
所属研究機関名：東北歴史博物館
部局名：学芸部
職名：副主任研究員
研究者番号(8桁)：60754562

研究協力者氏名：真柄 侑
ローマ字氏名：(MAGARA, yuki)
所属研究機関名：東北学院大学大学院
部局名：文学研究科アジア文化史専攻
職名：博士前期課程在籍

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。